

毎月、お寺では法話会がおこなわれていて、私たちは、容易に仏法の話聞くことができ、ありがたいことですが、仏法により近づくためには、そういう聞法と同時に、仏書を求めて読むということも大切であると思います。仏書については、書店にいて、あれこれと本を手にとって選りながら、自分自身に似合ったものを求めることができます。これからは、縁があれば、そういう仏書を手に入れて読んでください。

ただし、仏書にもピンからキリまでがあるので、よくよく探し求めて、ほんものの仏書を手に入れてください。仏書というても、まったく教義的な説明、解釈をしたものがあって、本願とはどうということか、名号とは

何かというようなことを書いたものがあります。そういうものはだめで、著者自身の仏法をめぐる心の味わい、自分の思いを書いたものを求めてください。すなわち、自分自身が、真宗念仏、真宗信心を、どう生きているかという、自分自身の思いを語ったものこそ、もったも大切で、そういう仏書をこそ探し求めてください。

仏法の書店が身近になければ、京都の仏教書店に尋ねてください。京都では「法蔵館」(電話・〇七五―三四三―〇四五八) ファックス・〇七五―三七一―〇四五八) がよいでしょう。いろいろとカタログを送ってもらって選んでください。私の法話集もあるはずで、



な おまた、本を読むのがしんどいと思われる方には、法話のテープを求めて、それを聞くのもよいでしょう。そういうテープは、皆さんの仲間たちが多くお持ちのはずですから、それを借用して聞いてください。私の法話も、京都で話したものが録音されてたくさん売られておりますので、よろしければ求めてください。

京都・六角仏教会(電話・〇七五―二二一―〇八五九)に申込んでください。

このように仏書を読むテープを聞くことによつて、自分の心にひびいたものは、繰り返して読む、繰り返して聞くということがあります。必要だと思いませんか。「読書百遍、意おす。」

ことにすこし程度をあげて、親鸞さまの書かれたものの『正信偈』とか、『歎異抄』などを読んでみたいと思われる方は、住職に相談してください。その場合

には、自分で読んで気に入った文章心にひびいた文章は、かならず書きとめて、時おり思い出しながら、口にだしてみてください。そうすると、その文章の意味が、より深く味わえてくるようになります。

たとえば、

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞ、まことにおはします。」

「聖人のつねのおほせには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに、親鸞一人がためなりけり。」

「生死の苦海ほとりなし、久しく沈めるわれらをば、弥陀仏誓の船のみぞ、乗せてかならずわたしける。」

などという文章はどうでしょうか。いずれも親鸞さまの言葉です。

皆さんも、自分の心にひびく文章、言葉があったら、誰の言葉でもいいから、それをいつも思いだして口ずさんでみるということ。そうすると、いつのまにか、その文章、言葉が、自分の人生を生きるのに、大きな支えとなってくるものです。

### 仏書を読もう

信楽峻磨

安楽寺寺報

# 聞光

第71号  
降誕会号  
2014/5/21

発行所  
〒737-0054  
呉市上山田町2-28  
安楽寺  
0823-21-7561

## 花まつり子ども大会



4月19日の土曜日、今年も西教寺蔵本支坊で 花まつり合同子ども大会を開催いたしました。今年71名の子ども達が集まり、賑やかな一時を過ごすことができました。



安楽寺子ども会も子どもが減っています。子ども達も習い事等で忙しくなっていますが、是非時間を見つけて、ご参加下さい。日程は安楽寺だより等でお知らせいたしておりますが、基本的には毎月第2土曜日の10時～11時です。お勤めとお話しの後遊びます。また4月は花まつり大会、夏休みの錬成会や本山参拝、12月の報恩講子ども大会は合同子ども会で、お楽しみ満載ですので、是非お誘い合わせの上、ご参加下さい。



## 安楽寺マンガ通信

その24 信楽めくひ作



安楽寺法要案内	
六月	<p>永代経法要</p> <p>日時 6月14日(土)・15日(日) 両日とも朝席・昼席</p> <p>講師 三重 正覚寺 内田正祥師</p> <p>講題 願以此功德「この願の功德を以て」 ~どのような功德なのでしょうか~</p>
七月	<p>安居会</p> <p>日時 7月12日(土) 朝席・昼席</p> <p>講師 住職自勤</p> <p>講題 迷信~迷いの人生~</p>
八月	<p>歡喜会</p> <p>日時 8月13日(水)・14日(木) 両日とも朝10時~11時</p> <p>講師 信楽峻磨前任職</p> <p>講題 先祖の日に思う</p>
九月	<p>彼岸会</p> <p>日時 9月13日(土) 朝席・昼席</p> <p>講師 安佐北 東善坊 龍花康丸師</p> <p>講題 信心とは</p>



先日、釋徹宗先生が取りもつてくださったご縁で、大阪の天王寺にある応徳院というお寺の住職、そしてパドマ幼稚園という幼稚園の園長でもある秋田光彦先生とお話をする機会がありました。この応徳院というお寺は「日本一若者が集まるお寺」といわれ、「葬式をしないお寺」という肩書きのお寺で、何があるのかというとなかなか人が集まって、それぞれ思いの催しをやって、それによって人が集まっているというお寺です。この秋田先生はもと、映画プロデューサーで色々と映画を撮って来られたそうです。私が知っているのは「アイコ十六歳」という映画を撮られていました。海外にも名前が売れたほどの映画プロデューサー兼脚本家だったようで、一生その道を歩むつもりが、色々な事情でお寺に帰らなくてはならなくなったそうです。(よくある話しです)



副題にもついていますように映画には人の生老病死が表現されています。私たちが学ぶ気で見れば大変な教材

そして現在幼稚園の園長にもなり、今は幼児教育のエキスパートです。できる人は何をやってでもできるんだと羨ましく思います。先生は今はこの仕事に就いたことをとても有難く思っていると言っておられました。そういう経歴ですからどうして映画は見えておかないと気が済まないらしく、年間五十本の映画を見ると言うのがノルマだとおられました。「DVDで見たのは映画を見たとは言わない」と言われるんですからさすがです。それがまた良く細部まで覚えておられて、釋先生も大の映画好きですから、何か話してもすぐに映画の話題になってしまいます。そのお二人の最初の映画談義が「仏教シネマ」お坊さんが読み説く映画の中の生老病死という本になっています。それが今大変な売れ行きで、文庫本にもなりました。よろしければ読んでみてください。

になり得るわけです。本の中にはゾンビ映画までも宗教の映画として解説してあります。ゾンビと言う存在には西洋の宗教観だからああいう表現になるよ、日本では幽霊にはなっても、ゾンビのようなものにはならないんだそうです。



その戦うグラディエイターを癒やす風呂を作れという使命を浴場設計者のルシウス(阿部寛)が受けるわけですが、悩んでいるうちになぜか日本にタイムスリップして、そこから喜劇となっていく。古代ローマと現代日本を比べると、色んなものが見えてきます。そのギャップが笑いになります。映画の中で、グラディエイターという戦士同士が殺し合う闘技場が当たり前だったルシウスにとって、日本の相撲というのは、驚愕にあたいする格技だったわけです。二人の男が戦うのは同じだけれども、方や剣や斧を使い、殺すことで勝者となる格技に対し、日本の相撲は手には何も持たず、土俵から足が出れば負け、と言うような全く思いもつかない勝敗の決め方だったわけです。



「なんと平和的な」と感嘆するわけです。考えてみれば足が出たら負けなんて言う格闘技はそうそうありません。基本的にはおしくらまんじゅうとかわりません。

### 仏事のイロハ

#### お寺と門徒

もし、お寺にお墓があったり、お寺名義の納骨所に先祖の遺骨を納めていたりすると、その管理についても話しておかねばなりませんし、転居先の住所もきちんと知らせておく必要があるのです。そうした管理上の問題がなく、お寺から離れると言うのであれば、その旨を告げ、ご住職の了解を得て、転居先に近いお寺を紹介してもらってください。

中には別にお寺との関係を持たなくても、葬式の時だけで大丈夫と思っている方があるかも知れませんが、お寺は死ぬときに必要なものと考えられているでしょう。しかしお寺というのは、本来的に「今生きている人にみ教えを説く所」であり、今の生活を離れてあるのではないのです。その点、全国どこのお寺でも門戸は開放されています。

是非、どこかのお寺とご縁を結んでください。



是非、どこかのお寺とご縁を結んでください。

私のお寺では、寺報をつくって送っています。時たま、「転居先不明」で返ってくる場合があります。「ああ、引越してしまわれたのか...」「それとも何かあったのかなあ」とあれこれ考えたり、「どうして連絡してくれなかったのかなあ」と寂しくもなります。

近頃は、一生同じ土地で過ごす人はまれになり、特に都市部では引越しがしばしば行われます。そんな時、ガスや電気、水道、電話などはきっちり転居届を出されるのですが、お寺への連絡を忘れる(?)人がおられます。お寺としては、それはみ教えを伝える上から、また案内や諸連絡を行う上からも非常に困るわけで、必ずお寺に来て、転居後のお寺との関係をしっかりとっておいていただきたいのです。

それは和歌のことはよく分かりませんが、日本の文化の根底にそうした和の文化、和を大切にしている文化があるのではないかと思えます。日本の祖聖徳太子は「和を以て貴しとなす」とも言われました。それに反して国の中枢は集団的自衛権、改憲ときな臭くなっていきますが、和の国日本の文化を大切にしたいものです。